

活動報告書

報告者氏名：福住 健 所属：新潟県 見附市立 見附特別支援学校 記録日：平成26年2月26日

【対象群の情報】

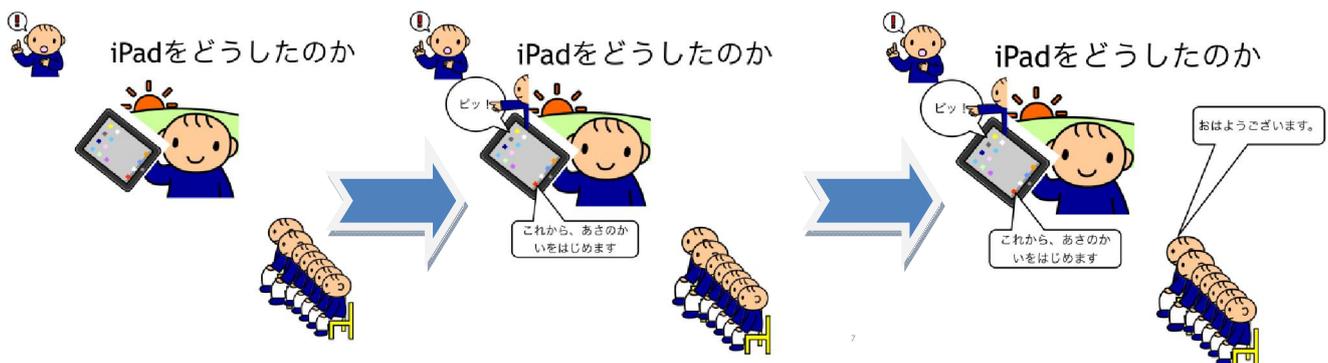
- ・ 学年
 - 高等部1年生8人（男子6人、女子2人）
- ・ 障害名
 - 知的障がい（生徒 A.B.D.E.G.H）
 - 知的障がいを伴う自閉症（生徒 F）
 - 注意欠損多動性障がい（生徒 B.E）
 - その他（生徒 C）
- ・ 障害と困難の内容
 - 言葉でのコミュニケーションが苦手な生徒が在籍し（生徒 F）、自分の気持ちや要望を主体的に表現するための支援策が必要。（学級の係活動などで活用）
 - 中学部からの卒業生と、市内の中学校の特別支援学級を卒業した生徒が混在する。そのため新しい人間関係を築くために有効な支援策が必要。（4名は当校中学部の卒業生、4名は市内の中学校からの入学生）

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
 - 言葉でのコミュニケーションが苦手な生徒が、iPad と Drop Talk HD を組み合わせた支援具を使用することで、朝の会の司会などコミュニケーションスキルが必要な係活動に取り組む姿を引き出す。
- ・ 実施期間
 - 平成25年4月から平成26年3月
- ・ 実施者 福住 健（高等部教諭）
- ・ 実施者と対象生徒の関係 学級担任と担当学級の生徒
- ・ 研究協力団体
 - 新潟市障がい者 IT サポートセンター ・ 明倫短期大学 附属歯科 ことばクリニック

【活動内容と事前の状況】

- ・ 対象群の事前の状況
 - 対象生徒のうち3名は iPad を学習で使用した経験がある（生徒 D.F.G）。5名は使用した経験がない。
 - 対象生徒 F は、言葉でのコミュニケーションが苦手であるが、支援具があれば朝の会の司会が可能である。
- ・ 活動の具体的内容
 - 朝の会、帰りの会で、生徒が係活動を行うための支援具として、iPad と DropTalk HD を使用する。この支援具は、生徒全員が自己判断で使用できるものとする。



【対象群の事後の変化】

□ iPad 導入後の様子

- 4月24日 実践スタート
- 5月8日 教師の支援がなくても DropTalk HD の操作ができた
- 10月29日 アプリの音声を聞いて教科名を復唱した
- 10月30日 またアプリの音声を聞いて教科名を復唱した

「これから朝の会を始めます。」を「これから朝の会を始めます。〇〇さん、はい。」と録音しなおした。変更後、S Tがマイクに模した棒状の支援具を使用して声を出すタイミングを知らせる支援を行った。

11月27日 支援なしで復唱することができるようになった。

<こんなことも1>

生徒 F が困っていると、自発的に使い方を助言したり、操作の手伝いをしたりする生徒が現れた。



<こんなことも2>

休憩時間（昼休み）に生徒 C.H（市内の中学校の特別支援学級を卒業）が生徒 F（当校中学部の卒業生）に話しかけるなど、自分から関わろうとする様子が見られるようになってきた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

☆生徒 F にとって発声が必要な役割を担当するためのツール→ツールを使えば、自分も時間割を発表できる。→声を出して発表してみようと思う。→潜在的にもっているコミュニケーションの力を引き出すことができたのではないかと。

○気づきに関するエビデンス

（朝・帰りの会での生徒 F の行動観察から）

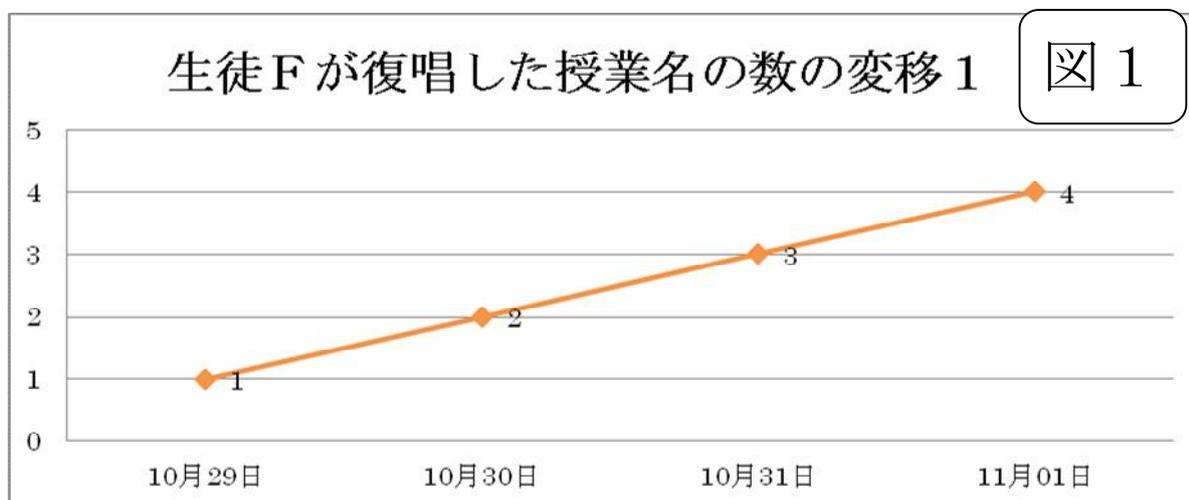
・10月29日に生徒 F が、帰りの会で一部の授業名を復唱した。10月30日には、朝の会と帰りの会で一部の授業名を復唱した。そこで、復唱が持続すると考え、支援方法を変更した。

・その結果、11月27日に支援なしで、全ての授業名を復唱できた。その後、日によって差はあるものの、独力での復唱は継続した。

以上のことから、DropTalk HDには自発的な復唱を引き出す効果があると考えられる。（図1、2参照）

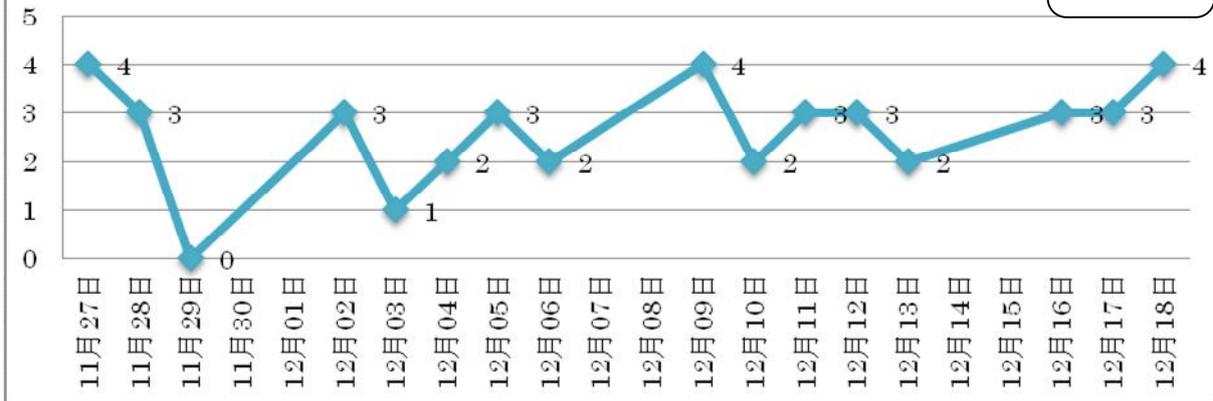
生徒 F が復唱した授業名の数の変移 1

図 1



生徒Fが復唱した授業名の数の変移 2

図 2



<こんなことも 1 >について

○主観的気づき

☆周りからの自発的な支援を引き出した→生徒 A. B. C. D. E. G. H にとっては支援しやすいツールだったのではないか。

○気づきに関するエビデンス

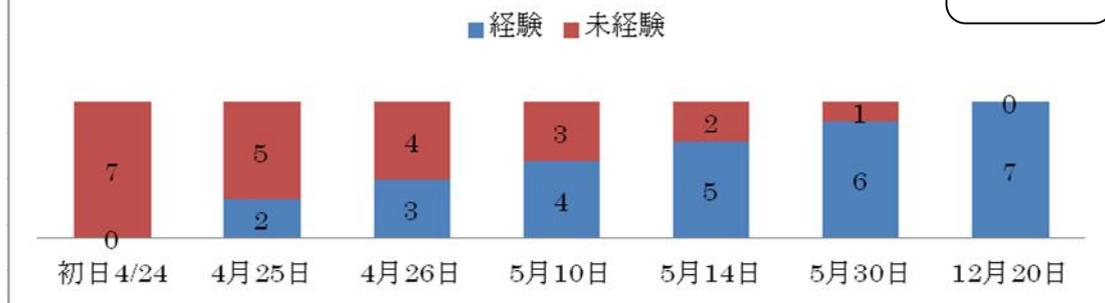
(生徒 A. B. C. D. E. G. H が自発的に生徒 F の支援を行った状況分析から)

・生徒 G については、自発的な支援を行うまで 8 か月を必要としたが、他の 生徒については、約 1 か月で生徒 F を支援するようになった。これは、iPad と Drop Talk HD の accessibility が優れていたからだと考ええる。

「指をスライドさせるとロックが解除される」「シンボルに触れると音声再生される」など理解しやすい構造が良かった。支援を行った生徒に「自分も使える」→「友達を手伝える」という想いが芽生え、連鎖していったのではないかと考える。(図 3) と考える。

支援経験者の累積人数

図 3



<こんなことも 2 >について

○主観的気づき

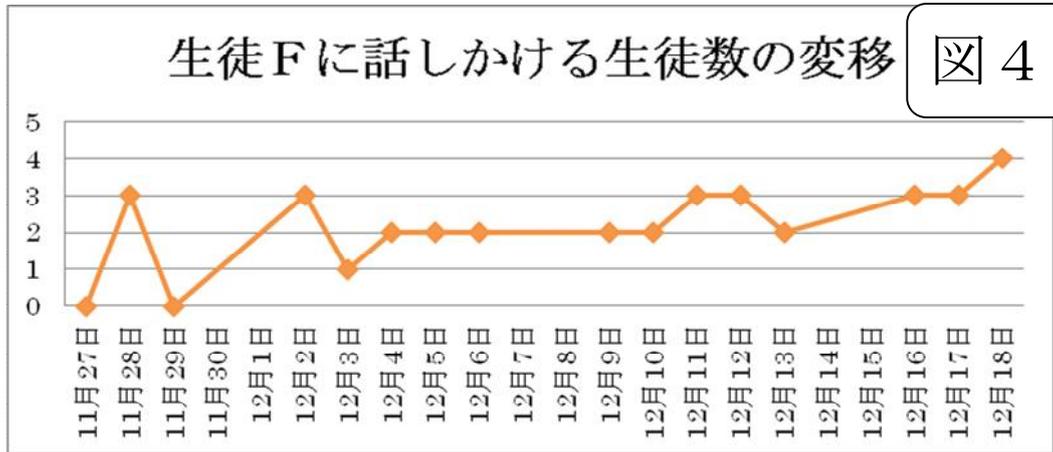
☆授業以外の場面でのかかわりを引き出した→生徒 F を支援する経験を重ねたことで、友達に声をかけようという気持ちが生まれたのではないか。

○気づきに関するエビデンス

(生徒 A. B. C. D. E. G. H が自発的に生徒 F に話しかける様子を観察して)

・生徒 F が支援なしで授業名の復唱を行うようになった 11 月 27 日の翌日から、休憩時間に一部の生徒が生徒 F に対して話しかける様子が見られた。(図 4) 日によって人数が変化したり、話しかける生徒が変化したりしている。これは、生徒 A. B. C. D. E. G. H が、<こんなことも 1 >に記載した生徒 F を支援する経験を重ねたこと、生徒 F が 11 月 27 日から支援なしで授業名の復唱するようになったことなどが影響していると感じる。

生徒Fに話しかける生徒数の変移 図4



・その他のエピソード

- 日記を書く活動や計算の学習で iPad (U-PAD) を使ったところ、鉛筆とのノートを使っていた時よりも学習に集中できる時間が伸びた。また、漢字を書く活動では、自分で画面を拡大し、漢字の細かな部分に気をつけながら書く様子が見られるようになった。
- iPad の便利さを体験したためか、自分から保護者に iPod touch の購入を交渉し、説得に成功した生徒がいた。手に入れた iPod touch に暗算アプリや漢字アプリを入れ、家庭学習の場面で積極的に使っている。買い物の場面にも iPod touch を持ち込み、計算機アプリを使って買い物をしている。

・今後の見通し

教室に iPad を導入することで、「当初のねらい」対して、想定していなかった成果が（生徒同士の支援、休息時間の自発的な関わり）上がっている。また、円グラフ（図5）から友達への関わりが、多い生徒と少ない生徒がいることもわかった。友達への関わりが少ない生徒への支援も今後の検討課題となる。しかし、これは実践の経過であり、今後状況が変化することも十分考えられる。iPad が集団生活を支援する機器として、どんな効果があるのか引き続き実践し、経過を検証していく。

生徒Fに対する自主的な支援の頻度

■生徒A ■生徒B ■生徒C ■生徒D ■生徒E ■生徒G ■生徒H

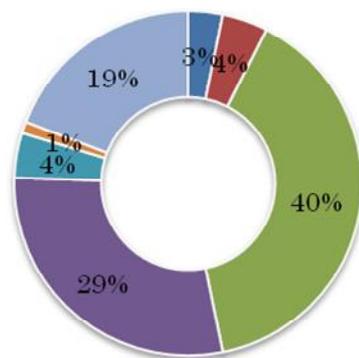


図5